

「...この国は神から離れてしまったの でしょうか？」

さて、全米中最も解放的であり、自由主義と無神論の活発なパークリーのあるカリフォルニア州から三人の連邦判事により、国旗への忠誠の誓いの「神の下に」と言う言葉が、憲法違反であるという判決が（二対一で）下されました！

訴えを起こしたのは無神論者で、自分の娘が学校であるの不愉快な言葉を含めた忠誠の誓いを強制されたと述べました。その娘はマイケル（無神論者にしては何という名前でしょうか！）・ニュードウという人に利用されたに過ぎないのです。ニュードウは、私達の使うお金から「神を我等は信じる」という語句を取り除く為に長年戦ってきました。

本当の事を言えば、彼の娘は同級生と一緒に誓いの言葉を冷静に朗唱していました。フォックス・ケーブル・ニュース（Fox Cable News）で質問を受けていた時、ニュードウは娘の事を聞かれて立腹しました。「娘を巻き込むのは止めてくれ！」と彼は鋭い口調で言いました。「お嬢さんを巻き込んだのはあなたですよ。」とインタビューの担当者が同じ様に鋭く言いました。

最近のアンケートによると、86%のアメリカ人は「神の下に」という言葉は残しておくべきだと思っており、11%の人は省くべきだと述べた事が分かりました。3%は「分からない」と答えました。

この言葉は、「神を信じない共産主義とか無神論」があらゆるアメリカ人の心に宿っていた時、故ドワイト・D・アイゼンハワー大統領によって忠誠の誓いに付け加えられました。

コインや紙幣に見られる「神を我等は信じる」という言葉は、1956年の議会によってアメリカ合衆国の国家的な標語に決定されました。しかしながら、その起源は南北戦争中のアメリカのコインに刻印されたものであり、後に我が国の国歌となったフランシス・スコット・キーの詩の中で少し違った形で現れました。

自由寛大な法廷は今日ジレンマに直面しています。最近下されたこの判決を巡って国民の怒りが煮えたぎっている中、第9巡回裁判所で全員一致で判事の決断を覆さない限り、連邦最高裁は恥を晒しかねない決断を迫られるかもしれません。なにしろ、1992年に学校の卒業式でお祈りを止めさせ、2000年にアメフトの試合で学生主導のお祈りに対して不利な判決を下したのは最高裁であったのだから。そのようなお祈りには、「その場に居合わせた人達に宗教的な礼拝行為への参加を強要する、不適切な効果がある」と最高裁は述べました。一個人がいったいどの様に礼拝を「強要させられる」のかは明解ではありませんでした。礼拝に反対する人は他の人が祈っている間、黙って立って居ればいだけなのです。

さて、「ニュードウ対カリフォルニア州」を巡る現在の訴訟が連邦最高裁に持ち込まれた場合、最高裁は自ら下した以前の判決を取り消さなくてはならない破目に陥るかもしれないのです!もし最高裁が世間の政治的な意見に耳を傾け、それに同意すればの話ですが。

アメリカ合衆国下院が反抗声明として、国会議事堂の階段に集まり大声で忠誠の誓いを朗読しました。その光景はツインタワーが崩壊した翌日に同じ階段で「God Bless America」を歌った事を思い出させるものでした。自由主義の民主党議員でさえも怒りを表しました。ダッシュル、リーバマンそれにバード上議員も皆厳しい態度で判決に異議を唱えました。

無神論者が一般の人の意識から神に関する言葉を全て取り除こうと試みた最近の事件に、神を信じる人達は全く驚く事はありません。と言うのも、イザヤが次の様に予言しているからです。「彼らは平和の道を知らず、その歩む道には裁きが無い。彼らは自らの道を曲げ、その道を歩む者は誰も安息を知らない。それゆえ、裁きは私達から遠退き、正義が私達に追いつく事も無い。私達は光を望んだが、見よ、闇に閉ざされ、輝きを望んだが、暗闇の中を歩いている。盲人の様に壁を手探りし、まるで目を持たないかのように手探りする。真昼も夕暮れ時の様につまずき、死人の様に虚無に包まれる。私達は皆熊の様に唸り、鳩の様に呻く。[何百万と言う人達が己の苦難を嘆き、涙を流して悲しむが、自らを省みる事なく全て他人や物事のせいになります!]正義を望んだが、それは無く、救いを望んだが、それは私達から程遠いも

のであった。御前に、私達の背徳の罪は重く、私達の罪が自らを貶める証言と成る。背徳の罪は私達と共に在り、私達は自分の咎を承知している。主に對して偽り背き、神から離反し、虐げと裏切りを口にし、心より偽りに染まった言葉で謀り騙そうとする。そして、裁きは背を向け、正義は遠く佇んでいる。眞実は路地で地に落ち、平等の入る隙間も無い。眞実は失われ、悪を拒む者は餌食となる。主はそれをご覧になり、正義の不在に気分を害された。」(イザヤ書59章8-15節) アメリカ合衆国の政治、経済、社会、及び宗教的な風潮を、これほど上手く述べたものは在り得ません。

預言者ゼファニヤは、イスラエルの典型としてエルサレムを用いて、次の様に記しました。「弾圧と汚れに満ちた暴虐の都に災いあれ!この都は神の声を聞かず、戒めを受け入れなかった。主を信頼せず、神に近づこうとしなかった。この都の中の役人達は吼え猛る獅子で、裁判官達は夕暮れの狼である。彼らは全てを食らい尽くし朝には骨さえ残らない。預言者達は、気まぐれで不忠実な者共であり、祭司達は聖地を汚し、律法を破る。正しき主はその中に居られ、決して不正を行わない。毎朝裁きを光の下に行い、誤りをなさる事は無い。だが、不正を行う者は恥を知らない。」(ゼファニヤ書3章1-5節)

「神の掟の廃止」は、敬虔なクリスチャンにとって重要な基盤となっていますが、不思議な事に、上訴裁判所が「神の下に」という語句を含む誓いに不利な判決を下したと怒っているのは「名ばかりのクリスチャン」です。

パウロが次の様に予言したのもまさしくこの為なのです。「しかし、終わりの時には困難な時期が来る事を悟りなさい。その時、人々は自らを愛し、欲張り、ほらを吹き、高慢になり、両親に従わず、恩を知らず、不浄と成り、愛情に欠け、不和を持たらし、嘘の非難をし、節度が無く、荒れ狂い、善を嫌い、人を裏切り、突発的で、思い上がり、神よりも快樂を愛し、信心を装いながら、その実、信心の力を否定するようになります。こういう人々を避けなさい。」(テモテへの手紙II、3章1-5節) そうです、宗教で信心を「装う」人が何百人も居るのです。彼らは自らの祈りや主張が、天井や競技場の照明の高さにも届いていない事に少しも気付いていません。神は罪人や、神の正しい聖なる掟を踏みにじり続ける人達の祈りを、単純に聞き入れたりほしないのです。

アメリカは信心を装う事に執着して、十戒を守ろうとしません。人々は神に口先だけの言葉を謙譲します。彼らは神を「讃え」ます。彼らは神とその子、イエス・キリストを「崇拝」します。或いは、そう思い込んでいます。しかし、イエス・キリストは言われました。「私を『主よ、主よ』と呼びながら、なぜ私の言う事に従わないのか」。(ルカによる福音書6章46節) またイエスはこうも言いました。「私に向かって、『主よ、主よ』という者が皆、天の国に入るわけではない。私の天の父の御心に従う者だけが入るのである。」(マタイによる福音書7章21節)

若い貴族がイエス・キリストに救いを得る為に自分は何をしなければならないのかと尋ねた時、イエス・キリストは何千人もの敬虔なクリスチャンの牧師が答える様には答えませんでした。彼らはこう言ったことでしょうか。「おや、若者よ、救いを得る為にあなたがしなくてはいけない事はなにもないという事をご存じないのですか？あなたはただ信じるだけで良いのです！私を信じなさい、そうすれば救われることでしょうか！」しかし、イエス・キリストはこう言いました。「…もし生に迎え入れられたいのなら、掟を守りなさい。」(マタイによる福音書19章17節)。若者がキリストの言っている事を正確に理解出来るように、キリストは続けて十戒について詳細に語りました。

かなり以前、最高裁はポルノは法律に違反していないという判決を下しました。アール・ウォーレンの時代から、またそれよりずっと前から、この国の最高裁は、神の視点と聖書の基準から見てとんでもない決断を何度も下してきました。

愛国心に満ちたアメリカ人は、判事が愚かで理不尽な判決を下しても、驚く必要はありません。「その方は評議員を裸足で追いやり、裁判官を愚かしめる」と神は仰っています。(ヨブ記12章17節) 快楽的な国民、虚弱で勝手気ままな国民、家族がめちゃくちゃになった国民、何百万という胎児の殺害を認め、ポルノや暴力、犯罪に身を任せる国民、殺人犯の死刑を嘆き悲しむ国民、同性愛の権利、動物保護や狂気の環境保護者達の国民(彼らの法律が執行された結果、広大な森林火災が発生しました)、世界中の3分の2のGNP総額より多くのお金を掠めるホワイト・カラーの詐欺師達の国民。こういった人達は愚かな判事が明らかに間違った決断を下しても驚く事は無いはずで

しかしながら、ニュードウ氏は知る事となるでしょう。我が国の忠誠の誓いに対する彼の非難が、結果として新たな愛国心の火種となり、真の神への帰依とまで行かずとも、少なくとも今のアメリカに未だ存在する宗教の「装い」の目を覚まさせる事になったのだと。

驚いた事に、彼が全国的な騒動を巻き起こし、連邦政府から学校や教会にまで到るところから怒りを招いた後で、忠誠の誓いは違憲であると判決を下した判事がその判決を「保留」にしてしまいました。これは判事が必ずしも自らの確信のもとに判決を下していたのではないという確かな証拠です！彼が世間の激しい抗議、圧力に対応したのは明らかです。したがって彼の、素晴らしいと伝え聞く司法見解は、情勢に依存した倫理に過ぎず、時代の流れに屈したものです。なんと恥ずべき茶番なんでしょう。

